

## 強かれ、柔軟たれ

上野直蔵

ご卒業おめでとうございます。

同志社は国際主義を標榜する、といわれてまいりました。国際主義、とひと言で申しますが、時事語としてのみこれを捉えるのでありますれば、国家相互の理解と協調を旨として世界人類の平和と友好を目的とする立場をさすものでありましょう。それはそれでいささかも文句のつけようのない立場であります。言うは易く、行なうはなかなか難しい内容を含んでおります。と申しますのは、こういう立場をまもるには、しっかりとした基本姿勢というものがふまえられていなければならぬからであります。相互の理解、とひと言で申しますが、そこには言葉の問題が介在しております。ベトナム難民の処遇の問題にいたしても、いろいろ相互の誤解があるようであります。が、簡単に通訳の不手際、ということだけではすまされないものがあります。それは、そもそも相互の文化の相違の無理解からよってきたものではないか、と思っております。ひとつの国語を異な

る国語に移しかえるだけでは、理解協調はなしとげられますまい。それを生みだした文化をどのよう異なる文化の言葉で表現するか、と最終的にはそこまできつくのではないのでしょうか。

話は変わるようですが、皆さん、有名な『マタイによる福音書』第五章第三節の「心の貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである」というみ言葉をご存知でありましょう。私、聖書釈義には素人でありますので、いつもこのみ言葉をきくと、ふと奇異の念に駆られるのであります。と申しますのは日本語では「貧しい心」といいますと、なにか、利己的な「さもしさ」を思わせるからであります。どうしてそういう人が幸いなのか。英訳聖書のいろいろにあたってみましても、プーア (poor) とありますし、中世のラテン語訳聖書にもやはり「貧しい」にあたる言葉があります。聞くところによると、ギリシャ原文では、「神に信頼をよせる素直な心」を意味するらしいのです。この背後にあるヘブライ文化で、「貧しさ」と「心」が結びついたかけには、当時貧しい人々はいつも社会の強い権力層から圧迫、搾取されていた、世俗の権威からの保護を期待できないので、いきおい、心を強く神に向け、神にのみ望みを託するようになった、というような事実がひそんでいるのだそうです。翻訳や通訳には訳そうとする言語の文化と、日本文化とのちがいに常に留意する必要があります。最近出ましたプロテスタントとカトリックの共同訳の聖書には、このところは「ただ神により頼む人々は幸いだ」という風に訳してあって、そういう点の配慮がうかがえます。

国際主義というのは、外国や異質文化の理解による自国に対する冷静で理知的な観察眼から出発する、といってもよろしいかと思えます。もちろん外国理解と自国理解というのは同時に相乗作用を起し、それが国際主義となって定着するものでありましょうが、要は、いたずらに自国文化心酔

という、らわれた視点にたがずに、一見理解をこえる異質文化を理解することによって自国文化を  
てらし、そのてらされた自国文化の理解がまた異質文化の理解へと作用していくのであります。同  
志社人はそういうことができる。そういうところに同志社の国際主義の本質を見たいと思っております。  
ます。私はそういう意味で、若い層の同志社マンにぜひふんと期待をよせております。人口、食糧、  
資源、戦争の危険等の多くの問題をかかえながら二十一世紀には世界と日本はどのような姿になる  
のか、私どものような老人にとってはそれは未来学の問題でありまして、若い人々には、二十一  
世紀は活動の舞台であります。

日本人が世界の中で、自己本位に生きる時代ではもはやありません。世界史のどんなかすかな変  
動も、今後ますます日本の社会に反映されていくでしょう。自ら考え、自ら行動する、力強く、柔  
軟な個人の形成をめざして、同志社での教育を育てていかねばなりません。昨今の日本の各方面  
の教育は、ともすれば、力強い柔軟な個人よりも、むしろ孤独な競争をつづける利己的人間の形成  
に力を注いでいるようです。同志社の教育方針が実は往古、新島 襄がその『設立の旨意』で強く  
訴えましたように、まさにこの強い柔軟な個人、すなわち「独自一己の気象を發揮し、自治自立」  
の若者の養成にあつたのであります。力強い柔軟な個人は自立するとともに人々と連帯することが  
できます。異質文化との連帯は外国との相互理解をいってはなしえません。相手を知るために己れ  
を知る。己れを知るために相手を知る。国際人というのものはや単なる外国通たることを指すので  
はありません。バタクさい起居振舞に終始する人物をいうのではありません。

ただいたずらに外国先進文化をとりいれる時代はすぎました。ただいたずらに軍事力を誇って世  
界の中で孤立する時代もすぎました。ただいたずらに経済力にものをいわせて、自国文化をおしつ

ける時代もすぎました。今、力強い柔軟な国際人たるものは「相手の国の身になって考えることを忘れないでいる人」であることが要請されています。「その国の身になって」ものを考えることは、相手の身になることによって自分とひきくらべ、結局自分の国の理解につらなるものであります。世界の中で自立するとともに、他国と協調する同志社人、しかも若い同志社人の登場を望みます。

校祖新島 襄はつとにそのような同志社人、若い同志社人こそ「知識あり、品行あり、自ら立ち、自ら治むるの人民」と規定いたしました。それこそ「一国の良心とも謂ふべき人々」なのであります。

異質なものを理解する能力といい、相手の身になって考える能力といい、所詮それは「愛」の精神であります。自分を愛すると、同じように自分とは異質な他人を愛することのできる姿勢であります。神と隣人への愛といってもよいでしょう。さきほど一寸触れましたので、ひとつ共同訳の新約聖書からイエスのみ言葉を引用してみましよう。『心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、お前の神である主を愛せよ』。これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛せよ』。(『マタイによる福音書』第二十二章、第三十七、八節)人間誰しも自分が一番かわいい、自分の主義主張、感情、持物を大事にする。しかし、それと同じ気持ちで他人をかわいと思うことのできる、ということはいはれたいした愛の柔軟性だと思えます。

新島 襄のことばにももう一度耳を傾けてみましょう。「上帝を信じ、真理を愛し、人情を敦くする基督教主義」。「人情を敦くする」とは隣人を愛し、隣人と和らぐことでありましよう。所詮国際主義の旗印は、この愛の精神を基幹とせざるかぎり旗印たりえないのであります。今年の卒業式には、私は特に若き同志社人にこのことを強く希望しておきます。強かれ、柔軟たれ、と。

(同志社総長・理事長)

## 手を携えて進め

三木 英雄

諸君、卒業おめでとう。

諸君の中には、働きながら自力で卒業される人もおられるでしょうが、ほとんどの諸君は、ご両親の大きいなる助力によってはじめて、今日を迎えることができたと言っても過言ではありません。また、兄弟姉妹や親友、さらには恩師たちの協力も決して小さくはなかったにちがいない。このようにふり返ってみますとき、自分自身の今日が、多くのひとびとの善意に支えられて在るといふことを忘れてはならない、そのことを、社会へ出発しようとするこの時に、もう一度心の中に刻みつけてもらいたいものと思います。そういう感謝の気持が、これから実社会を生きてゆく上で大切な精神の土台となるにちがいません。

現代は、「不確実性の時代」とも、あるいは「海図のない時代」とも言われております。石油に代表されるエネルギー危機、東南アジアや中東を中心とした国際政局の緊張と、その波をもろに受

ける宿命にある日本経済など、一年先さえ予測しがたい問題を、われわれは数多くかかえているのです。諸君がこれから第一歩を踏み出そうとしている社会は、極めて厳しい試練の場であると言わざるをえません。その試練を明日から、諸君は自らの力で切り開き、混迷の社会を生きぬいてゆかなければならないのであります。

そういう言い方をすれば、法にふれさせなければかまわない、他人を押しつけてでも、生存競争に勝ちぬかなければならないと言っているように聞こえるかもしれませんが、決してそうであってはならない。諸君は社会の中の一人として在るのであって、社会と無縁に存在しうるはずはないのであります。社会を維持してゆくための最低限の条件は、法規によって示されるでしょうが、しかし、よい社会をつくり上げるためにはそれだけでは極めて不十分であります。人の和、すなわちお互の人格を相互に尊重しあうという人間の叡智、人間の「愛」による肉付けが必要です。今日のような時代であるからこそ、お互が協力し合って、少しでも自分たちのものであると言えるような、そういう社会をつくっていかねばならないのです。そのためにはまず、他人の立場を理解するよう努めなければなりません。自分を誰かに理解してもらうことは、その誰かを自分の方から理解しようとする心がかかることなくしては、とても達成できるものではありません。

今の世の中を見まわしてみる時、どうも自己主張が蔓延しすぎているような気がいたします。自己主張のぶつかり合いからは、いい結果はまことに生まれにくい。むしろ、自己主張がすべて悪いとは申しませんが、その中には、世のひとびとを先導してゆくような創造的なものもあります。しかし、そういうときでも、「自分こそが社会をリードしてゆくエリートなのだ」といった、他人を無視する思い上がりが含まれてはいはしないか、冷静に反省してみる必要があるように思えてなりま

せん。いかにその発想が創造的であつても、それを他の人に理解してもらふ努力を欠くならば、それは独りよがりになつてしまふでしょう。ことに、権力とか金力とか多数とかをたのみ、少数者や弱者を無視するならば、せつかくの創造も、結果として闘争や破壊を招くほかはありません。そこには、相互信頼と隣人に対する愛が欠如しているからなのです。力のある者は、特にこの点に留意し戒心しなければならぬと思います。案外われわれは、つまらないところで意地を張り合つたり、自己満足におちいつたりしているかも知れない。もしそうだとしたならば、それらは人間どうしの本当の「出会い」を除去し、自分たちの社会をみずからの手で壊すことになりかねないのであります。

校祖新島襄先生は本学を設立されるに当たり、「一国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、実に一国を組織する教養あり、智識あり、品行ある人民の力に抛らざる可からず」と述べられて、互に異なる個性の結合こそが社会を維持発展せしめるのだと教えられました。そしてその結合の力を神の下における人間相互の愛にもとめ、それに覚醒したひとびとを「一国の良心」とよび、その養成を念願されたのであります。この同志社設立の目的は現代においてますます重要な意味を帯びてきております。この信念に貫かれていた本学を、これから築立っていかうとしている諸君は、だから「一国の良心」として隣人に対する愛を忘れないでいただきたい。人間にとって何が重要なのか、諸君のおかれたそれぞれの立場において、このことを常に念頭におくならば、情報過多の現代においても判断を誤まらずにすむはずであります。

しかしながら、隣人に対する真実の愛を自らの行動基準とすることは、これまた大変な勇気を必要とすることでありましょう。これからの道程には困難も多ければ、ときには挫折することもあり

ましよう。そんな時こそ、新島先生の人生とその思想を想いおこそうではありませんか。日本の状況を憂え、国禁を犯して脱国を試みられた新島先生はその時、諸君と同年輩の二十一歳でありました。一八七九年新島先生が第一回卒業生に贈られたお言葉を諸君とともに想起したいと思います。

Go, go, go in peace! Be strong! The Mysterious Hand will guide you.

諸君は若者らしく、隣人と手を組んで、あらゆるものへ勇気をもってチャレンジしてほしい。失敗を怖れてはならない。失敗は若者のいわば特権であり、新たなチャレンジの糧となるにちがいません。諸君の御健闘を祈ります。

(同志社大学長代行)

卒業生に贈る言葉

## 「自己の確立を」

岡野久二

今春卒業されるみなさんに心から祝意を表します。みなさんは大学院あるいは学部に必要な課程を無事終えられ、学窓から実社会へ巣立ってゆかれるのですが、みなさんを待っている一九八〇年代の世界は、国際的には政治情勢が緊迫しており、国内的には石油問題を中心としたエネルギー危

機や経済問題など克服、解決しなければならぬことが沢山あり、予断を許さない状態にあります。端的に言えば、一九七〇年代は六〇年代に続いて経済成長の時代であり、GNPとか生産高が文明の尺度であるかのように遮二無二経済力の増強がなされてきましたが、その反動として、八〇年代は生産過剰と財政再建、ならびに限りある資源、特にエネルギー源の確保が重大問題となること予測されます。こうした物質面の問題が私たちに生活の不安と耐乏を余儀なくさせる世の中にあつて重要なことは精神面の強さであります。言葉を代えれば、八〇年代は今まで以上に人間の精神力や思想の強さが試される時代と言えます。物質文明の極度の発展に伴つて、今や私たちの心は滔滔たる時代の潮流に押し流され、自壊作用を起し、自己喪失の状態にあります。その自己を取り戻し、自分というものの究極的な価値を追求し、自分の存在を再認識すべき時期が到来しているのです。

今、話題になっているアメリカの心理学者、ウエイン・W・ダイアー (Wain W. Dyer) は、彼の著書、「自分のあやつる糸は自分が引くこと」(Pulling Your Own Strings) の中で、現代社会の中で私たちが自己の生き方を徹底的に追求することの重要性を説いています。彼は、「自分の人生を自分で支配できなくなったら、あなたは犠牲者である。支配、これがキー・ワードだ。もしあなたが『糸』を引いていないのなら、他の人あるいは自分以外のものによってあやつられていることになる。犠牲にされる道は数限りなくあるのだ。」(渡辺昇一訳)と、人間の自分に対する主体性確立の必要性についてのべています。巨大な物質文明の中で自己を見失い、自己をアイデンティファイできなくなっている現代人にとってはダイアーの言葉は傾聴に値する警鐘といえます。自主的に自分というものの価値を探求することは、人生いかに生きるかということと大いに関係があり、人間は古来より「いかに生きるか」を探し求めてきているのですが、文明文化の発展と共に社会が

複雑化し、多様化してきて、単なる哲学や宗教についての表面的な知識だけでは真の生きる道を見いだすことは難かしくなっています。しかし、難かしいからと言って「自分の人生を支配できない犠牲者」となることは許されません。

今こそ、人口に膾炙かいしやされている、「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあけてもらえるからである」(マタイによる福音書七・七―八)という聖句の教えのように、物質文明の脅威きょうゐに怯おそえることなく、積極的に自己の内的崩壊を食い止める努力をし、自己を確立してゆく必要があります。

校祖新島襄は高潔なる愛国の士であって、常に祖国日本のために祈られ、大学の設立を念願されたのも、大学が「文化の源、いな一国の基」と考えられたからであります。そして、「一国を維持するは、決して二三英雄の力に非らず、實に一国を組織する教養あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず、是等の人民は一国の良心とも謂ふ可き人々なり、而して吾人は即ち此の一国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す」とのべられています。逆に言えば、先生の「所謂の良心を手腕に運用するの人物」によってはじめて一国は維持されるのであります。良心を手腕に運用する人物とは知性のみならず徳性をかね備えた円満な人格を意味するのですから、立派な個性をもった、自己を確立した人物なのであります。一九八〇年代から続いて二十一世紀を創造すべき責任を負っているみなさんは、国のため、社会のため良心を手腕に運用するためにも、まず自分の生きる道を見出し、自己を確立することが急務であります。そして、これからの社会の中核となつて、わが国の発展のために健闘されんことを祈って止みません。

(同志社女子大学長)